

真夏の日

関西大学 社会安全研究センター 小澤 守

筆者は播州平野のはずれの山の中で生まれ、18歳の高校卒業までそこにいた。我が家がかやぶきで、小学校に入学するころまで囲炉裏があり、屋内で火をたくので天井はすすけて、年1回の大掃除には長い竹ぼうきなどですす払いをやったものである。小学校は木造校舎で、もちろん冷房も暖房もない。夏休みは8月1日から31日までだったが、一般的にはもう少し長いと知ったのは筆者が神戸に出てきてからである。田植えや稲刈りの農繁期には手伝うために数日間休みがあったことから、その分、夏休みが短かったのだろう。

夏になると草むらにはキリギリスの鳴き声（喉から声を出しているわけではないが）、アブラゼミの喧騒のなか、麦わら帽子にキュウリを刺した竿をもってキリギリス釣りにいそしんだ。8月もお盆になると一家総出で墓掃除と墓参り、そのころになれば夕刻にはヒグラシが、昼間はツクツクボウシの天下になる。空中には赤とんぼが飛び回り、たまにオニヤンマが出てくると慌てて虫取り網を取り出して追い回したものである。飛行速度は2m/s程度だそうだが、簡単には捕まらない。図体は大きいのに方向転換がとても速い。竿の先にとまった赤とんぼの目の前で指でくるくる円を描いていると、向こうも目玉を動かすから頃合いを見計らって手でつかむ。こんなことが簡単にいくわけではないのは当然前で、筆者も成功したのは精々2～3回しかない。

そんな長閑な田舎が昭和58年9月の台風10号で一変した。加古川に杉原川が合流するあたりで氾濫したのが最も大規模だったが、筆者の田舎を流れる畑谷川も大きな災害を引き起した。筆者の家の裏と横に水田があり、その向こうに小さな谷川があった。その谷川に奥深い山谷からの水が流木と共に押し寄せて、小規模ながら氾濫し、流木と土砂が横の水田を覆い隠してしまったのである。我が家は幸いにしてその谷川から数十メートル離れていたもので、特に被害はなかったが、横の水田を飲み込んだ洪水が南隣の家を直撃し、崩壊させてしまった。またその谷川が流れ込む加古川支流の畑谷川でも上流から大量の土砂が流れ込み、トンボや魚の住処は完全に潰れてしまった。

古来より水田で生計を立てていた日本では、平地ではため池を持ち、そうでない場合には、山裾まで開墾し、谷筋から水を引いて稲作を行っていた。稲作では常に水が必要で、昔からの村々では近隣の人達と調整しながら水を分け合う体制が自然と出来上がっている。水田の見回りや農作業の利便性から住居も当然ながら水田の近くに位置している。この時の出来事は人身災害には至らなかったが、先祖がその地に住み着いて以来、初めての出来事であったらしい。

当時、神戸にいた筆者も両親の無事を確認したのち実家に駆け付け、水田の土砂の排除や隣家の納屋の片付けなどで数日実家に留まった。ただ最近、線状降水帯の形成に伴って従前の記録を大きく更新する降水があり、全国各地で河川の溢水や堤防の決壊が頻発している。筆者の田舎は例外なく人口減少が顕著だが、その地が再度過去のような災害に見舞われたら対応や復旧に携われる地元の人がほとんどいないことになる。一方都市部では人が集中し、古来より人が住まな

かった山裾を切り分けて多くの家屋が立ち並んでいる。そうした地の住人は山谷川の怖さを経験したことがないのではないだろうか。かつて寺田寅彦が「災害は忘れた頃にやってくる」と言ったが、おそらくこれは地震災害が対象であり、降雨災害激甚化のいまでは、「災害はいつでもどこにでもやってくる」と書き換えなければならないだろう。

ごく最近、けたたましく鳴くクマゼミの嵐の中で、アブラゼミのメスがオスの声を聴き分けておずおずと接近していく様を目撃した。懐かしさとうれしさ、なんとなく気恥ずかしさが混在したひと時であったが、このように昔から慣れ親しんだ蛍、トンボ、魚などの住処が、災害のたびに大きく崩壊していくのだろう。筆者が追いかけたオニヤンマも、いつの日か絶滅危惧種になるかもしれない。

